



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	小学校体育の学習評価の研究・その2
Author(s)	立木, 正
Citation	東京学芸大学紀要 . 第5部門, 芸術・体育, 39: 221-230
Issue Date	1987-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/12139">http://hdl.handle.net/2309/12139</a>
Publisher	
Rights	

## 小学校体育の学習評価の研究・その2

立 木 正

保健体育学

(1987年6月10日受理)

### 1. ま え が き

臨時教育審議会の第三次答申<sup>18)</sup>は、第四章の「スポーツと教育」の中で、「学校体育については、生涯スポーツ、スポーツの生活化を推進する観点から、その内容を見直す必要がある。……学校生活を終えて社会に出た後においても継続してスポーツ活動を楽しむことのできる技能や態度の育成を図ることに配慮する。……」ことを提言している。

また、教育課程審議会の中間まとめ<sup>7)</sup>における「教育課程の基準の改善に関する基本方向について」の「教育課程の基準の改善のねらい」の中では、「国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること……個に応じた指導を工夫することが大切である」と論じられている。

さらに、中央教育審議会教育内容等小委員会の審議経過報告<sup>10)</sup>では、「今後特に重視されなければならない視点」の中で、「個性と創造性の伸長」を取り上げている。

これらの答申や提言は、今後の学校体育の方向として、生涯スポーツを目指し、個性を生かし、個に応じた指導の重要性を指摘していると言えよう。

前回は、「小学校体育の学習評価の研究・その1」<sup>17)</sup>として、新しい体育理念に基づいた学習評価のあり方を理論的に明らかにし、小学校体育授業の評価理論としての試案を提示した。

つまり、新しい教育評価の考え方をふまえ、授業のシステム化に基づいた楽しい体育の評価の基本構想図を作成すると共に、楽しい体育の学習評価の観点を明らかにし、児童と教師側から見た評価の一般的モデルを作成したのである。

今回は、その試案をもとに、児童の自己評価能力の育成に焦点を当てることにした。

生涯スポーツを目指した今後の学校体育の方向を考える時、すべての子どもの現在の力量から出発した体育の学習指導が重要であると考ええる。

先行研究によると、生田<sup>2)</sup>や相部<sup>1)</sup>等の「体育の授業における個別指導の事例研究」等の研究がなされているが、児童の学習の準備状況のとらえ方や、めあての設定の仕方についての類似・関連した研究は、必ずしも豊富とは言えない。

ところで、嘉戸<sup>5)6)</sup>は、「体育嫌いの背景」を論じ、「体育の不得意な子への楽しさ体験の拡大」の重要性を指摘している。また、波多野等<sup>12)3)</sup>は、「運動嫌い」は、個人差を考慮していなかった点にも原因があることを指摘すると共に、体育授業の中で運動する楽しさや技術向上の喜びを経験できないことが「体育授業ぎらい」の生起にかかわる大きな一つの要因であると指摘している。

\* Study of Evaluation of Learning in Elementary School Physical Education; Tadashi TSUIKI

(Department of Health and Physical Education) (Received June 10, 1987)

これらの研究結果からも示唆され、かつ、永島<sup>11)</sup>も指摘しているように、今後の学校体育の方向は、卒業後に楽しみのため、身体のためにスポーツを実践できる人間の育成を目指し、一部の子どもではなく、すべての子どもを大切にす大衆スポーツを念頭に入れることが必要であると考えられる。

体育嫌いや運動嫌いの子どもをつくらず、全員の子どもに体育授業が好きであるようにするには、一人ひとりの子ども自らに、自分の能力に合っためあてを持たせ、その課題解決に向かって自発的、自主的に、意欲を持って取り組ませることが必要であろう。

細江<sup>15)</sup>は、子どもの学習の準備状況のとらえ方の重要性を指摘し、①運動の特性に触れる楽しさ体験の状況、②特性に応じた楽しみ方に関する学習経験の状況、③技術の習得状況、の三つの項目の視点から学習の準備状況をとらえようとしている。

そこで、本研究では、柳本等<sup>16)</sup>が指摘している小学校体育の運動領域で人気が高い「跳び箱運動」に焦点をしばり、児童自らの学習準備状況の把握の仕方とめあての設定の仕方を、自己評価のメカニズムとの関連の中から考察しようとするものである。

これは、生涯にわたって運動を愛好し、自発的、自主的に意欲を持って運動を実践し継続していく児童の育成にとって、意義深いものとする。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校体育の跳び箱運動における自己評価のメカニズムを明らかにするとともに、児童自らの学習準備状況の把握の仕方とめあての設定の仕方の試案を提示することである。

## 3. 研究の手順

文献調査により、自己評価の意義・重要性を論じるとともに、小学校体育の跳び箱運動における自己評価のメカニズムを明らかにした。

さらに、跳び箱運動における児童自らの学習準備状況の把握の仕方と、それに適しためあて設定の試案を作成した。

## 4. 本 論

### 4.1 自己評価が重視される背景

藤原<sup>14)</sup>が論じているように、自己評価が重視される背景には、教育における伝統的な教師中心主義が根本的に反省されたことが上げられよう。つまり、教師による単なる評定から、教育目標との有機的な関連を求める多面的評価の方向へと発展する過程において、学習者の自己評価の側面の重要性が明確に認識されるようになったのである。

また、他の学習者に比べて、出来るか出来ないかという問題よりも、その学習者は何がわかり、何が出来ないかが重要である。その際、学習者は何がわかっていると自分は考えているか、どこが出来ないかと思っているかを明らかにして、学習者の主観的認識と客観的状態との関係を的確にとらえ、それに基づいて適切な働きかけをすることが重要であるという主張がされるようになったことも、自己評価が重視される一つの背景であると言える。

学校教育においては、評価の主体は教師であろうが、生涯学習や自己学習能力の育成を考える時、究極的には自己教育ができる学習者に必要があろう。

さらに、自発的・自主的な学習が一層望まれる今後において、自己評価が学習者の学習における内発的動機づけとして重要な機能を持つところにも、自己評価の重視される背景があると考えられる。

#### 4.2. 自己評価の意義・重要性

これからの学校教育において、自らの目標を自分自身で設定し、自らの成果をその目標との関係で常に自己評価しながら学習を進めていくことは、今後、特に重要であろう。

梶田<sup>4)</sup>の、「教育とは、基本的に児童・生徒の自律的な歩みを教師が援助していくものである。」との論は、今後の学校教育の重要な方向を示唆しているものと言えよう。

児童が学習の中で自己評価を行い、自己理解を深め、学校教育を終了した後においても、自律的に学習を継続していくことができるようになることが非常に重要である。

つまり、学校教育の中で自己評価を取り入れる第一の意義は、生涯学習、あるいは、自己教育のためといってもよいであろう。

さらに、自己評価が実際の教育活動において大きな意味を持つてくるのは、それが学習者の意欲に深くかかわってくるせいでもある。

自己評価が意欲の喚起へとつながるためには、①自分が現在やっていること、これからやろうとしていることについて明確な見通しを持ち、自分自身のやったことや達成したことをそれとの関連において位置づけること、②児童に関する客観的な資料をできるだけ多く本人にフィードバックし、客観的な実態把握に基づいた自己評価であること、③自己評価をさせる前提として、一人ひとりの児童が目標とすべき水準について指導し、適切な目標水準との関係での自己評価であること、を常に念頭に入れておく必要がある。

自己評価を行うこと自体が一つの学習活動となり、それが同時に有効な動機づけの機能を持つことになる。

自己評価が学習者の自発性に基づいて行われるようになれば、学習者の学習が意欲的・積極的に展開され、自己教育が達成されるようになる。

なお、自己評価の定義は、小林<sup>8)</sup>をはじめ種々あろうが、ここでは、辰見<sup>9)</sup>の、「自己評価とは、児童・生徒が自己の学習状況や学習成果について自分自身で評価することをはじめとして、自己の行動、性格、態度などを自ら反省し評価することをいう。」という論でとらえることにする。

#### 4.3. 跳び箱運動における自己評価のメカニズム

速水<sup>13)</sup>の「自己評価のメカニズム」(図1)の考え方を参考にし、「跳び箱運動における自己評価のメカニズム」の試案を提示することにする。

##### (1)自己目標

自己目標は、学習のめあてに当たるものである。跳び箱運動の学習のねらいが教師により設定され、学習の道筋の中に、ねらい①、ねらい②が設定されることになる。このねらい①やねらい②を達成するために、一人ひとりの児童が自分の力に合っためあてを設定するのである。

他者評価の場合の学習のめあてが、教師から学級の全員の児童に同じように与えられるのに対して、自己目標は、教師の援助、助言を受ける場合もあるが、一人ひとりの児童が自発的、自主的に自分自身のめあてを立てるものである。

従って、跳び箱運動の自己目標には、かなりの個人差があるのは当然のことと言える。

跳び箱運動の自己目標の高低は、これまでの学習経験によって一人ひとりの児童に形成され

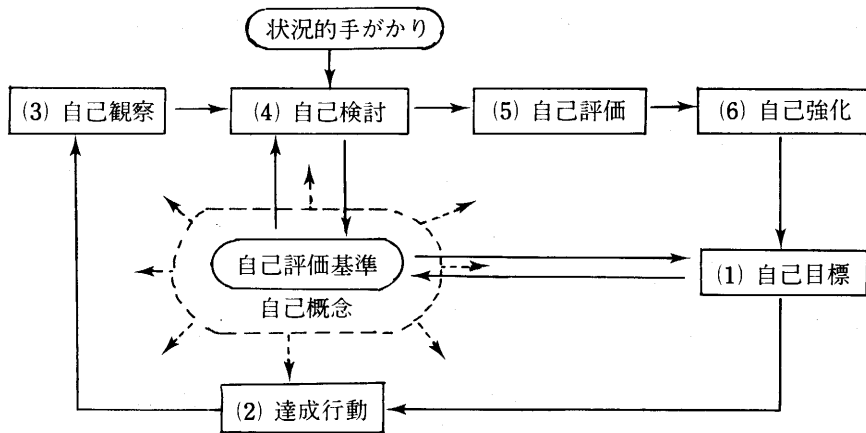


図1 自己評価のメカニズム

た自己評価基準（児童自身の、これまでの成功、失敗経験、他者からの評価等により形成されたもの）、あるいは、自己概念により定まり、自己評価を規定することになる。

#### (2)達成行動

達成行動の位相は、自分自身の設定した自己目標（学習のめあて）に取り組むことを意味する。特に、自発的、自主的に学習に取り組むためには、自分にとって跳び箱運動の学習をすること自体がおもしろく意味があり、克服する喜びや達成する喜びを味わえる跳び箱運動の機能的特性に触れることが重要である。

つまり、自己目標が明らかになればそれで十分というわけではなく、適切な教師の援助や助言があり、はじめて児童は内発的動機づけを高めて達成行動を生起させると考えられる。

#### (3)自己観察

自己観察の位相は、自分自身の思考活動や学習行動をよく観察することを意味する。自分の中に評価する自分と、跳び箱運動をしている評価される自分、の二人を置き、自分自身を客体化して観察するものである。VTR等において、跳び箱を跳んでいる自分を自分で観察する時と同じ機能を有していると言えよう。

#### (4)自己検討

自己検討は、自己観察したものを、過去の経験や蓄積した技能や知識、さらには、友だちや教師がどれほど出来たのかといった情報など（状況の手がかり）と照合して検討することである。特にこの位相では、友だち間の教え合い、助け合い、励まし合い等が重要な要素となると考えられるが、教師の援助や助言（手のつき放し方や着地の仕方、踏み切り方や空中姿勢等）が、自己評価を個人的・主観的・感情的なものにしないために重要な役割を果たすものと言えよう。

#### (5)自己評価

ここでの自己評価とは狭義の自己評価であり、学習の道筋や学習成果のよしあしを値ぶみすることのみをさす。跳び箱を跳び越すことが出来なかった原因や、つまずきの原因を考へることもここでの自己評価である。認知や情意の程度がどの程度かを問題にする場合が多い。

#### (6)自己強化

自己強化は、行動の賞罰を外から与えるのではなく、自律的な判断によって自分で賞罰を

与えることである。めあてとした跳び箱をじょうずに跳べた児童は、「わあー！よくやったぞ。とべたぞー！」と、自分自身に言い聞かせ、満足感や成就感を味わうものである。そのことが次の活動へのバネとなり、動機づけになり得よう。つまり、強化刺激の自己管理をすることになる。

以上の「跳び箱運動における自己評価のメカニズム」を図に表すと、以下（図2）のようになる。

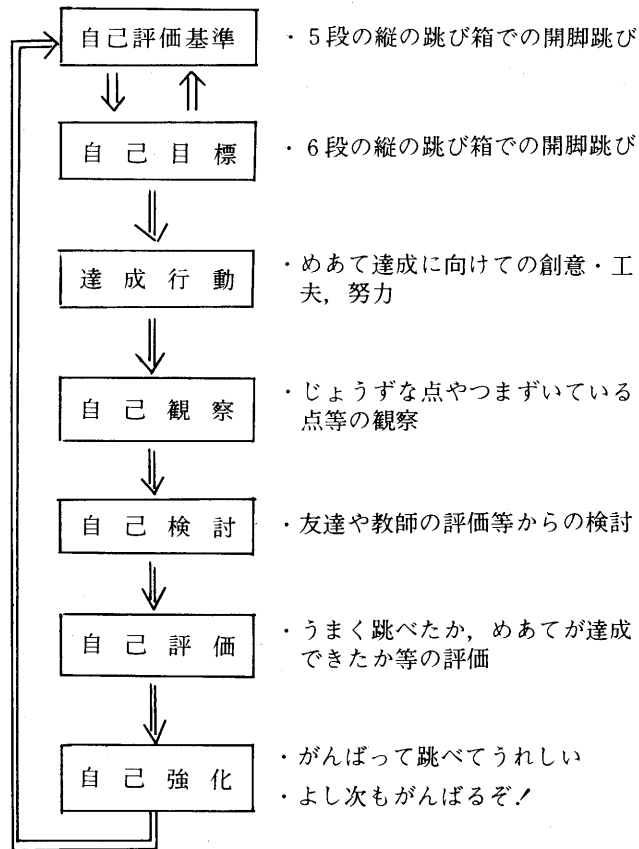


図2 跳び箱運動における自己評価のメカニズム(例)

#### 4.4. 児童自らの学習準備状況の把握の仕方

生涯スポーツを目指したこれからの学校体育では、児童の現在の力量から出発し、学習活動をできるだけ自発的・自主的なものにすることが必要である。

また、一部の児童だけではなく、すべての児童が運動の機能的特性を求め、特性に触れることができるようになるには、児童の立場から運動を取り上げることが重要となる。

学習する一人ひとりの児童には、運動に対する興味・関心、意欲、態度、知識・理解、体力、技能や経験等の様々な能力に関する個人差がある。

一人ひとりの児童が自ら自分の能力に合っためあて（自己目標）を設定し、そのめあての解決のために、創意・工夫、努力して、自発的・自主的に学習することは、生涯スポーツを目指

す今後の学校体育の方向にとって非常に重要なことである。

自己の能力に合った適切なめあての設定のためには、まずもって、今の自分の能力（学習準備状況）を的確に把握する必要がある。

ここでは、5年生の跳び箱運動における、児童自らの学習準備状況の把握の仕方の一方法を提示することにする。

学習準備状況の把握の視点として、①技術の習得状況（技能）、②楽しみ方の状況、③楽しさ体験の状況、の三つを設定し、それぞれの着眼点を明らかにしたい。

まず、「技術の習得状況」については、その把握のための着眼点として、㊦跳び箱の高さ、④跳び箱の向き、㊧跳び箱の跳び越し方、㊥フォーム、の四点をとらえることにした。

次の「楽しみ方の状況」に関しては、㊦自分の力に合っためあての把握、①人間関係（励まし合い、教え合い、助け合い、協力）、㊧安全、㊥場の工夫、④創意・工夫、努力による挑戦、三つ目の「楽しさ体験の状況」に関しては、㊦興味・関心、④意欲（機能的特性に触れた内発的動機）が着眼点として考えられよう。

学習準備状況の把握の仕方における視点の重点の置き方は、その運動の機能的特性との関連からとらえられよう。

跳び箱運動においては、運動の機能的特性を克服型と達成型の両方からとらえることにした。

特に、技術の習得状況に視点を当て、学習準備状況の把握につとめた。

㊦の跳び箱の高さについては、「何段の跳び箱を跳べるか」、④跳び箱の向きについては、「どんな向きの跳び箱を跳べるか」、㊧跳び箱の跳び越し方については、「どんな種類の跳び越し方ができるか」、㊥フォームについては、「安定したフォームで跳べるか」「大きな動作で跳べるか」などが、学習準備状況の把握の仕方の一方法である。（表1）

#### 4.5. 児童自らの学習準備状況に適しためあての設定例

「児童自らの学習準備状況の把握の仕方」の試案に対応して、「児童自らの学習準備状況に適しためあての設定例」の試案を提示することにする。

まず、「技術の習得状況」に関してのめあての設定であるが、学習準備状況の把握の仕方における着眼点が、そのまま対応はできない。

つまり、めあての設定における着眼点では、「高さ」「向き」「跳び越し方」「フォーム」等を別々の着眼点とすることには無理が生じることになる。

「高さ、向き、跳び越し方」を一つのセットにし、「4段の縦の跳び箱を腕立て開脚跳びで跳び越す」のようなめあてが設定されよう。

克服型の機能的特性を考えた場合の次のめあての設定の仕方は、「5段の縦の跳び箱を腕立て開脚跳びで跳び越す」ようなめあてとなる。

では、達成型の機能的特性を考えた場合の次のめあての設定の仕方は、「5段の横と縦の跳び箱を腕立て開脚跳びで、着地を遠くにして跳ぶ」という風にもなる。

つまり、技能面に関してのめあて設定の例は「学習準備状況における技術の習得状況」の着眼点の多数の組み合わせによって何通りにもなることになる。

次に、「楽しみ方の状況」に関してのめあての設定であるが、「心配、不安、退屈を感じない、創意・工夫、努力して達成できそうなめあて」や、「自分の力やめあてに合った場の選択」の観点からのめあての設定となる。さらに、「望ましい人間関係に関してのめあて」の設定も考えられよう。

三つ目の「楽しさ体験の状況」に関しては、「最後まであきらめずにがんばろう」のような

情意面のめあての設定となろう。(表2)

表1 児童自らの学習準備状況の把握の仕方

運動種目	視点		楽しみ方の状況	楽しさ体験の状況
	着眼点	技術		
跳 び 箱 運 動	高さ	・何段のとび箱を跳べるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の力に合っためあての把握</li> <li>・人間関係(励まし合い, 教え合い, 助け合い, 協力)</li> <li>・安全</li> <li>・場の工夫</li> <li>・創意・工夫, 努力による挑戦</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味・関心</li> <li>・意欲(機能的特性に触れた内発的動機)</li> </ul>
	向き	・どんな向きの跳び箱を跳べるか		
	跳び越し方	・どんな種類の跳び越し方ができるか		
	フォーム1	・安定したフォームで跳べるか		
	フォーム2	・大きな動作でとべるか		
:	:			

表2 児童自らの学習準備状況に適しためあての設定例

運動種目	視点		楽しみ方の状況	楽しさ体験の状況
	着眼点	技術		
跳 び 箱 運 動	高さ、向き跳び越し方①	・4段の縦の跳び箱を腕立て閉脚跳びで跳び越す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心配, 不安, 退屈を感じない, 創意・工夫, 努力をして達成できそうなめあて</li> <li>・自分の力やめあてに合った場の選択のめあて</li> <li>・望ましい人間関係に関するめあて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おもしろそうだ</li> <li>・跳んでみよう</li> <li>・最後まであきらめずにがんばろう</li> </ul>
	高さ、向き跳び越し方②	・6段の横と縦の跳び箱を腕立て閉脚跳びで, 着地を遠くにして跳ぶ		
	フォーム1	・踏み切りや手のつき放しを強くし, 大きな動作で跳び跳す。		
	:	:		

#### 4.6. 第5学年・女兒(K.T.)の跳び箱運動における「めあて」と「感想」

(10月15日)

- 跳び箱運動は, ぶっつけて足が痛くなるので嫌いである。
- 今まで, 2段の高さの台上前転ができた。

(10月24日)

- 〈めあて〉…5段の縦を跳べるようにしたい。
- 〈感想〉……生まれて初めて跳び箱を跳べて, とってもうれしかったです。今度は着地を安定してできるようにしたいです。先生に「こうすればもっときれいに跳べるよ」とか「跳び箱を押してみなさい」などと注意していただけてうれしかったです。今度の体育の時間が待ち遠しいです。

(10月29日)

- 〈めあて〉…5段の縦の着地をきれいにする。
- 〈感想〉……着地の時, 足を曲げて着地しなければいけないのだけど, 先生のように深く足を曲げると前につんのめってしまうから気をつけたい。
- 〈作文〉……今日も楽しく跳び箱運動をしました。もし前回の授業で跳び箱を跳ぶことができなければ, 今日ぶつぶつ文句を言って練習していたと思います。前回の授業の時もう少しで跳べるという時先生に, 「あと少しは気持ちの問題だな」と言われて, 思いきって跳ん



だのです。その時の私の気持ちは、すでにあきらめていました。「どうせ跳べないのだから」という気持ちが強かったので、跳べた時は自分で信じられずに、ただ口をポカーンと開けていました。今でも何となく跳べたという実感がわからないのですが、でもやっぱり5段が跳べてよかったなと思います。今度は6段の縦を跳んでみようかな?とっているのですが、何となくこわいです。やっぱり苦労した分、喜びが返ってきたと思います。

(10月31日)

○〈めあて〉…6段の縦を美しいフォームで跳ぶ。

○〈感想〉……5段の縦の時でも、跳ぶ時に腰が上がってしまうので、6段はちょっと危なかったけど、2回6段を跳んで跳べたのでうれしかったです。もっと練習して6段を軽く跳べたらいいなと思っています。緊張したけど、ちゃんと跳べてよかったと思います。

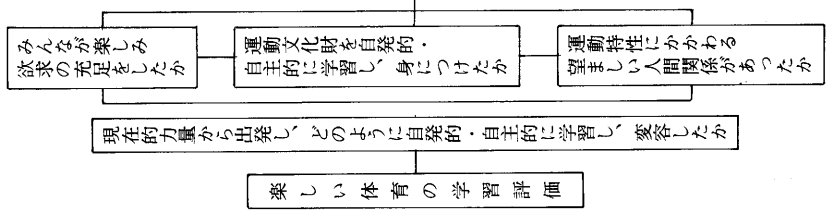
学級で最も跳び箱運動を苦手とし、好まない女兒である。2段での台上前転ができた経験はあるが、腕立て開脚跳びでの成功経験がない。創意・工夫、努力により、障害物を克服した喜びがよくわかる。めあて設定のための自己評価も適切であったようである。

## 5. あとがき

子ども自身が自己評価をし、適切な自己目標を持つことは、今後の学校体育に重要である。学習準備状況の把握の仕方との関連から、さらに子どもの側に立つ学習指導が重要となろう。

資料 児童側から見た評価 克服型(跳び箱運動)

評価観点	評価項目	評価標準	評価	価値	基準	準備
めあて	適正度	めあてが自分の力に合っていたか	ちょうどよかった	やさしかった むずかかった	やさしかった むずかかった	やさしすぎた むずかしすぎた
技能	達成度	めあてが達成できたか	十分達成できた	少し達成できた	少し達成できた	達成できなかつた
	習得度	練習してどのようにならなかつたか	どとび箱を高くして、むずかしいとび方でとべた	どとび箱を高くして、むずかしいとび方でとべた	新しいとび方でとべた	新しいとび方ができなかつた
マナー	進歩度	練習してどのようにならなかつたか	大きな美しいフォームでとびこすことができた	どとびこすことができた	どとびこすことができた	どとびこすことができなかった
	安全に対する態度	安全に気をつけて運動することができたか	いつも安全に気をつけてた	安全に気をつけてた	時々安全に気をつけてた	安全に気をつけてなかつた
協力	励まし合い教え合い	友達ができないことに対して、励ましたり教えたりすることができたか	いつも友達を励ましたり教えたりした	いつも友達を励ましたり教えたりした	時々友達を励ましたり教えたりした	友達を励ましたり、教えたりしなかつた
	活動の工夫	運動の仕方を工夫し、計画的にできたか	できるとび方や高さを考えた	できるとび方や高さを考えた	できるとび方で、むずかしい高さを考えた	むずかしいとび方で、むずかしい高さを考えた
創造性	活動の工夫	施設・用具の使い方の工夫ができたか	自分の力に合った用具を選んだ	補助用具を使った	補助用具を使った	工夫しなかつた
	意欲	自発的・自主的に力いっぱい活動して楽しめたか	自分から進んで活動した	自分から進んで活動した	友達や先生にすすめられて活動した	いやだから活動しなかつた
興味関心	意欲	運動のおもしろさがわかり、楽しく学習したか	じょうずにできたからおもしろかった	じょうずにできたからおもしろかった	じょうずにできたらよかったから、あまりおもしろくなかつた	できなかつたからおもしろくなかつた
	欲求充足					



引用・参考文献

- 1) 相部保美・生田清衛門他,「体育の授業における個別指導の事例的研究」日本体育学会第33回大会号, 1982. p.820.
- 2) 生田清衛門・相部保美他,「体育の授業における個別指導の方法に関する研究とくに劣る子に対する教師の指導」日本体育学会第32回大会号, 1981. p.790.
- 3) 伊藤精男・波多野義郎,「『体育授業嫌い』の生起に関する因果推論の試み」体育学研究, 27-3 : 239-46, 1982.
- 4) 梶田叡一, 教育における評価の理論, 金子書房, 1975. pp.91-95.
- 5) 嘉戸脩,「体育科教育の諸問題『体育嫌い』の背景から」東京学芸大学紀要5部門, 23:227-40, 1971.
- 6) 嘉戸脩,「体育の得意な子と不得意な子に関する比較研究」東京学芸大学紀要5部門, 33:165-76, 1981.
- 7) 教育課程審議会,「中間まとめ」(全文) 昭和61年10月20日, 学校運営研究, 321-12:97-124, 1986.
- 8) 小林利宣,「現代教育評価における自己評価の位置」指導と評価 vol.26 No.7, p.8. 1980.
- 9) 辰見敏夫編, 教育評価小辞典, 協同出版, 1979. Pp.270.
- 10) 中教審教育内容等小委員会,「審議経過報告」(全文) 昭和58年11月15日, 現代教育科学, 326-1 : 115-30, 1984.
- 11) 永島惇正「運動手段論から運動内容論への転換に関する一考察・その1」東京学芸大学紀要5部門, 35:209-18, 1983.
- 12) 波多野義郎・中村精男,「『運動ざらい』の生成機序に関する事例研究」体育学研究, 26-3 : 177-87, 1981.
- 13) 速水敏彦,「自己学習のための自己評価(一)」児童心理 No.36. 12, pp.168-84. 1982. 11月号.
- 14) 藤原喜悦,「生徒の自己評価と相互評価」橋本重治・肥田野直(監修), 教育評価の考え方, 図書文化, 1977. pp.276-79.
- 15) 細江文利「個性化・個別化教育と学校体育」学校体育, 40-5:22-28, 1987.
- 16) 柳本有二・波多野義郎,「小学校体育における運動種目嫌いに関連する要因について」東京体育学研究, 12:23-28, 1985.
- 17) 矢野久英・立木 正「小学校体育の学習評価の研究・その1」東京学芸大学紀要5部門, 36 : 201-09, 1984.
- 18) 臨時教育審議会第三次答申, 昭和62年4月1日, 文部時報臨時増刊号, p.58, 1987.